

安曇野検定〔歴史・文化・伝統編〕

ジュニアの部 学習資料

水が織りなす

あづみのこんじゃくものがたり

安曇野今昔物語



安曇野市教育委員会 社会教育課

目 次



1.	市の概要	1
2.	安曇野市を象徴する花と木	2
3.	里山	3
4.	姉妹・友好都市	3
5.	人物	5
6.	堰	10
7.	民俗・信仰	12
8.	特産物	13
9.	民話	16
10.	安曇野年表	20

安曇野市を知ろう

わたしたちの生まれ育った安曇野には、長い歴史があります。

それぞれの地域には昔から人々が生活する中から生まれた様々な伝統的な行事や芸能、伝えられてきた民話、伝説、風習などがあります。

私たちの先人たちは、どのようなことを考え、どのような知恵を出し合って現在の安曇野市を築いてきたのでしょうか。

安曇野は、自然環境に恵まれ、世界的にも活躍するすばらしい人材を多く輩出している文化の土壌の豊かなところです。

わたしたちも、ふるさとの歴史や自然の成り立ちのすばらしさを学び、自分のふるさとに誇りを持って広く国内外に目を向けていきましょう。そして、これからの安曇野をより発展させるために何ができるのかを考えていきましょう。

私たちのふるさと安曇野

1. 市の概要

【2010年9月2日更新】



安曇野市は、平成 17 年（2005 年）10 月 1 日に、豊科町・穂高町・三郷村・堀金村・明科町の 5 町村が合併して誕生しました。長野県のほぼ中央部に位置し、松本から電車で約 10 分から 30 分のところにあります。市内を通る鉄道は大系線と篠ノ井線があり、大系線には、梓橋、一日市場、中萱、南豊科、豊科、柏矢町、穂高、有明、安曇追分の 9 つの駅があります。また篠ノ井線には田沢、明科駅が市内にあり、通勤・通学の貴重な足となっています。最近ではウォーキングコースとして、明科地域の旧国鉄篠ノ井線・廃線敷コースが注目を集めています。

北は上田市、松川村、池田町、生坂村、筑北村、南は松本市に隣接しています。西部は雄大な北アルプス連峰がそびえ立つ中部山岳国立公園の山岳地帯であり、燕岳、大天井岳、常念岳などの海拔 3,000 メートル級の象徴的な山々があります。

「安曇野」と呼ばれる地域は、北アルプスを水源とする中房川、烏川、梓川、高瀬川などが犀川に合流する東部地区で、海拔 500 から 700 メートルの平坦な複合扇状地となっている地域です。

安曇野市の人口・広さ・標高・学校・公民館や図書館

人口・世帯数	【人口】 99,379 人 (男 48,221 人/女 51,158 人) 【世帯数】 37,589 世帯 ※平成 24 年 6 月 1 日現在・安曇野市調べ
面積	331.82 平方キロメートル
標高	550 メートル【安曇野市役所（本庁舎：安曇野市豊科 4932 番地 46）の標 高】 ^{ひょうこう}
市内学校数	小学校 10 校 中学校 7 校 高等学校 4 校
市内公民館・図書館	公民館：豊科、穂高（中央）、三郷、堀金、明科 図書館：豊科（豊科交流学習センター「きぼう」内（H23.2 月オープン）） 穂高（中央）（穂高交流学習センター「みらい」内（H21.9 月オープン）） 三郷（三郷公民館内） 堀金（堀金公民館内） 明科（明科子どもと大人の交流学習施設「ひまわり」内）

2. 安曇野市を象徴する花と木^{しょうちやう}

○安曇野市の花「わさび」



アブラナ科。日本^{げんさん}原産^{たねんそう}の多年草で、春に白^{はく}色^{しよく}四弁^{しべん}の小さな花を咲かせます。この可憐^{かれん}な花は日本一の生産量を誇る安曇野市の特産品である「わさび」の花です。

清涼^{せいりやう}な水に育^{はぐく}まれ身を寄せ合って咲く白い花は、安曇野市の美しい自然のもとで人々が支え合っていく象^{しょう}徴^{ちやう}として、ふさわしい花であるとして市の花に選ばれました。

○安曇野市の木「けやき」



ニレ科の落葉^{らくよう}高木^{こうぼく}で、山地に多く自生^{じせい}しています。

けやきは、安曇野では屋敷林などに使われ市民にも親しまれています。

大地にしっかり根を張り、幹^はや枝^{みき}が天に向かって堂々と伸びる姿から、安曇野市の発展の象徴としてふさわしい木であるとして市の木に選ばれました。

3. 里山

ながみねやま 「長峰山」

安曇野市の東に位置し、犀川、高瀬川、穂高川の三川合流を眼下に見下ろせる山です。安曇野の田園風景と北アルプスを一望できる絶好のビューポイントとして親しまれており、頂上には1971年（昭和46年）に建てられた高さ10mの「歴史の塔」があります。

1970年（昭和45年）5月に作家の川端康成、井上靖、日本画家の東山魁夷が訪れ、この地からの眺めを「残したい静けさ、美しさ。」と絶賛しました。



ひかるじょうやま 「光城山」

光城山は、かつて海野氏の一族である光氏が城を構えていた山です。狼煙を使い連絡しあう役目があったと思われ、山頂には火の守り神を祀る「古峯神社」があります。春には1500本のソメイヨシノが、遊歩道に沿って標高差400メートルの山の斜面を駆け上がります。

また、白鳥の飛来をたくさんの人に知ってもらうため、飛来確認後12月上旬から2月下旬にかけて、山の中腹に白鳥の姿をイルミネーションで浮き上がらせています。



4. 姉妹・友好都市

安曇野市には、旧町村時代からそれぞれの地域の縁で姉妹提携を結んでいる都市が、海外に2都市、友好関係を築いている都市が国内に6都市あります。そして、現在もその関係を存続して交友の輪を広げています。どのようなきっかけで交流が始まったのかを調べてみましょう。また、皆さんの地域でも参加できる催しがあったら、参加してみましょう。

友好提携都市名	交流の内容	提携をした町村
むさしのし 「武蔵野市（東京都）」	武蔵野市との交流は、旧豊科町において当時の武蔵野市関係者が豊科町出身という縁で始まり、昭和62年11月3日に姉妹都市盟約を結びました。 平成19年2月5日には安曇野市として友好都市提携を結び直し、武蔵野桜まつり、青空市、市民交流ツアーやスポーツ交流など民間レベルでも幅広い交流が行われています。	旧豊科町

えどがわく 江戸川区（東京都）	江戸川区との交流は、旧穂高町が旧有明小学校跡地を江戸川区へ譲渡したことが縁で始まり、昭和49年2月15日に友好都市盟約を結びました。 平成19年8月4日、安曇野市として友好都市提携を結び直し、区民まつりへの参加やスポーツ交流、青少年交流等を通じて友好を深めています。	旧穂高町
ふくおかしひがしく 福岡市東区（福岡県）	福岡市東区との交流は、旧穂高町において平成元年、古代「阿曇族」をルーツとする縁で始まり、平成6年11月3日、穂高町合併40周年を記念して友好交流推進協定を結びました。 平成3年からは青少年の相互訪問事業を行っており、安曇野市となっても交流を継続しています。	旧穂高町
みさとし 三郷市（埼玉県）	埼玉県三郷市との交流は、旧三郷村において「三郷」という同じ自治体名が縁で始まり、友好都市提携を結びました。 平成18年7月1日、安曇野市として友好都市提携を結び直し、住民ふれあい事業やスポーツ等を通じて市民交流を行なっています。	旧三郷村
さんごうちょう 三郷町（奈良県）	三郷町との交流は、旧三郷村において「三郷」という同じ自治体名が縁で始まり、各種交流事業を実施してきました。 平成18年7月1日、安曇野市として友好都市提携を結び直し、住民ふれあい事業やスポーツ等を通じて市民交流を行なっています。 2010年5月12日、安曇野市と三郷市・三郷町で構成される、三郷・安曇野友好都市交流推進協議会が当市において開催されました。	旧三郷村
まなづるまち 真鶴町（神奈川県）	真鶴町との交流は、旧堀金村において住民同士の交流が縁で始まり、平成7年9月15日堀金村合併40周年を記念して友好親善提携を結びました。 平成18年9月30日、安曇野市として友好都市提携を結び直し、青少年の相互訪問事業等を通じて市民交流を行なっています。	旧堀金村

姉妹提携都市名	交流の内容	提携をした町村
クラムザッハ (オーストリア共和国 チロル州)	クラムザッハとの交流は、旧豊科町があづみ野ガラスこうぼう かいせつ工房ゆいいつを開設した頃、クラムザッハにヨーロッパで唯一の国立ガラス専門学校があることを紹介され、このガラス専門学校を視察したことが縁で始まりました。 その後、相互そうご ほうもんだんの訪問団が行き来する中、平成元年6月に双方の友好会で友好協定を結び、平成5年11月25日には自治体同士で姉妹都市提携を締結しました。 平成19年11月4日、安曇野市として姉妹都市提携を結び直し、相互訪問など民間レベルでも幅広い交流が行なわれています。	旧豊科町
ごさんかいどう 五三街道 (中華人民共和国 遼寧省)	五三街道との交流は、旧三郷村において海外自治体と交流しようとの気運が高まったことから始まりました。 これに先立ち、三郷中学校と遼寧省海城第二中学校が友好姉妹校提携を締結していたことから、遼寧省内の五三郷(ごさんごう・当時)を紹介され、「三郷」が縁で平成10年5月28日に友好村郷提携を結び、安曇野市となってからも交流を継続しています。	旧三郷村

5. 人物

(1) 名誉市民

安曇野市の出身で、科学・芸術・伝統芸能などの分野において大きな功績を残した人たちです。今でもその功績が高く評価され、郷土の先人として多くの人々から尊敬を集め、美術館や記念館が建てられたり、舞台公演なども行われたりしています。機会をみて訪れてみましょう。

「青木 祥二郎」(あおき しょうじろう) 1914年(大正13年)～1999年(平成11年)

明科中川手に生まれ、本名は匡ただしといました。1928年(昭和3)、小学校を卒業と同時に郷里を出て、京都で日本画を学ぶ傍ら、観世流の謡曲を習得しました。

後に志を立て、能楽の道に入りました。内弟子時代は、苦しく又厳しい修業を積みしました。1978年(昭和53)5月28日に観世流の能楽重要無形文化財保持者(総合指定)の指定を受けました。

明科で行われている薪能に出演し、地域の芸術文化の振興にも大きな功績を残しました。



「熊井 啓」(くまい けい) 1930 年(昭和5年)～2007 年(平成19年)



豊科吉野^{よしの}に生まれ、幼少^{ようしょう}時代の6年余を過ごしました。1949 年(昭和24 年)に信州大学^{ぶんにりがく}文理学部^{えんげき}に入学し、演劇部^{やまなみ}「山脈」で演出をしながら、多数の公演^{たすう こうえん}をしました。1964 年(昭和39 年)、映画「帝銀事件・死刑囚^{ていぎんじけん しけいしゅう}」で監督^{かんとく}デビューし、翌年には、映画「日本列島」で日本映画協会新人賞を受賞^{えいがきょうかい}しました。2001 年(平成13 年)、松本サリン事件^{じけん}を題材^{だいざい}にした映画、「日本の黒い夏－冤罪－^{えいが}」を制作^{くろ なつ えんざい}しました。豊科交流学习センター「きぼう」に熊井啓記念館が開設されています。

「高橋 節郎」(たかはし せつろう) 1914 年(大正3年)～2007 年(平成19年)

穂高狐島^{きつねじま}に生まれました。1940 年(昭和15)に東京美術学校^{びじゅつ}(現東京芸術大学)研究科^{とうきょうげいじゅつ}を修了^{けんきゅうか しゅうりょう}し、主に日展・日本現代^{にってん にほんげんだい}工芸美術展^{こうげいびじゅつてん}を舞台^{ぶたい}に作品^{はっぴょう}を発表^{もんぶだいじんしょう}し、文部大臣賞^{ぶんぶだいじんしょう}等様々な賞を受け、審査員^{しんさいん}や理事^{りじ}としても活躍^{かつやく}しました。東京芸術大学教授として、学生の指導^{うしえ}にあたりました。また、「漆絵版画^{しつえい}」と呼ばれる漆芸^{しつ}を考え出しました。1982 年(昭和57)には、穂高町^{めいよちょう}の名誉町民となりました。1995 年東京芸術大学の名誉教授となり、1996 年に文化功労賞^{ぶんかくんしょう}、1997 年文化勲章^{ぶんかくんしょう}を受賞しました。



2003 年(平成15)には、北穂高^{せいこう}の生家の地に、安曇野高橋節郎記念美術館^{きねんびじゅつかん}が開館^{かいかん}しました。

「田淵 行男」(たぶち ゆきお) 1905 年(明治38年)～1989 年(平成1年)



鳥取県黒坂村^{こうとう}に生まれました。1924 年(大正13)に東京高等師範学校^{しはんがっこう}(現筑波大学)博物科^{げんつくばいがく}に入学^{はくぶつか}し、ギフチョウの研究を行いました。1945 年(昭和20)に穂高牧^{まき}に疎開^{そかい}し、高山蝶^{こうざんちょう}の生態研究^{せいたいけんきゅう}に入りました。翌年の1946 年(昭和21)6 月には、常念岳乗越^{じょうねんだけのつこし}で、高山蝶^{こうざんちょう}タカネヒカゲの幼虫^{せいたい}を発見^{ぼっとう}し、以来、生態^{せいたい}の研究^{けんきゅう}に没頭^{ぼっとう}して、その解明^{かいめい}に成功^{さんろく}しました。また、山麓のアシナガバチ・ギフチョウ・ヒメギフチョウの生態研究も始めました。1959 年(昭和34 年)には、数百回に及ぶ北アルプスの踏査^{とうさ}が実り、著書^{ちよしょ}「高山蝶^{こうざんちょう}」を出版^{しゅつばん}しました。

(2) 安曇野市ゆかりの著名人物

わたしたちの郷土には、これまでの長い歴史の中で 政治、教育、産業、芸術に多大な影響や功績を残した人々がいます。そして、今日なおその業績が伝えられ、後の世に及ぼした影響について語られています。皆さんも、これらの人々の足跡をたどって、どのような生き方をしたのかを考えてみましょう。

「荻原 碌山」(おぎわら ろくさん) 1879 年(明治12年)～1910 年(明治43年)



穂高矢原に生まれました。本名は荻原守衛といいます。1899 年(明治 32)に美術家を志して上京しました。1901 年(明治 34)、意を決してニューヨークへと渡米し、洋画の研究を行いました。その後、二度にわたって、フランスのパリのアカデミー・ジュリアンに入学して、傑作「坑夫」等を制作しました。ロダンの「考える人」と出会ったり、西洋・エジプトの古代美術の研究もしました。新宿角筈町にアトリエ「オブリビオン」(忘却庵)を建てて住み、文展で「女」・「北条虎吉像」等多数の作品が入賞しました。

穂高の碌山美術館には、毎年全国から多数の鑑賞者が訪れます。

「多田 加(嘉)助」(ただ かすけ) 1639 年(寛永16年)～1686 年(貞享3年)



三郷中萱に生まれ、襲名して加助と改め、庄屋役に就きました。1684 年(貞享 1) 2 月、天和年間からの凶作が続き、年貢の軽減を藩に願い出ましたが、家老のたくらみにより、庄屋をやめさせられることになりました。1686 年(貞享 3)、凶作と疫病が併発し、餓死者も発生して、藩では一層、年貢を納めることが困難になりました。

加助は、賛成する仲間と相談して、五か条からなる請願書を作り、12 名で奉行所に提出し、民衆 4 千人と共に、松本城下に参集し、訴えが受け容れられなければ江戸へ直訴の勢いもしました。(貞享騒動)家老の名義で願いが聞き入れられましたが、藩に欺かれ、主謀者として捕らえられてしまいました。11 月 22 日、主謀者加助以下 8 人が磔刑(はりつけ)に、家族等 20 人は獄門の刑(打ち首)に処せられました。

中萱に、加助の働きを顕彰して、貞享義民記念館が建てられています。

「臥雲 辰致」(がうん たっち) 1842 年(天保13年)～1900 年(明治33年)



堀金小田多井に生れ、幼名は栄弥といました。農家の副業の足袋底の作成の手伝いを機に、紡績機の発明に専念しました。1863 年(文久 3)に、安楽寺に入り 7 年間修業後、安楽寺の末寺臥雲山孤峰院の住職となりましたが、廃仏毀釈となり、還俗して臥雲辰致と名乗りました。1871 年(明治 4)に、外国綿業の進出に対抗するため、紡績機の発明に没頭しました。1873 年(明治 6)に、臥雲式紡織機(ガラ紡)を発明し、1877 年(明治 10)には、わが国初の内国勸業博覧会で最高の鳳紋賞牌を受けました。

「小林 喜作」(こばやし きさく) 1875 年(明治8年)～1923 年(大正12年)



穂高^{まき}牧に生まれました。17 歳頃^{りょう}から 獵を始め、獵のため北アルプス一帯を歩き回り、山道^{せいとう}に精通しました。当時、中房谷^{なかぶさだに}を起点とした槍ヶ岳^{きてん やりがたけ}への縦走路^{じゅうそうろ}は、4 日、5 日もかかっていた。そこで喜作は、自分が獵でよく知っている、大天井^{おてんしょう}から分岐^{ぶんき}して、赤岩岳^{あかいわけ}・西岳^{にしだけ}を経て水俣乗越^{みなまたのっこし}に下り、そこから東鎌尾根^{ひがしかま おね}を登って、たった 1 日で楽に行ける、いわゆる「喜作新道」を開拓^{かいたく}しました。息子^{かずお}の一男と二人で開拓^{かいたく}したこの道は、「アルプス銀座^{ぎんざ}」と呼ばれ、多くの登山者に親しまれています。

「ウォルター ウェストン」1861 年(文久1年)～1940 年(昭和15年)



イギリスのダービー近郊^{きんこう}に生まれました。1888 年(明治 21)、基督教の宣教師^{せんきょうし}として熊本^{ちやくにん}に着任しました。来日して間もなく富士山や日本アルプスに興味^{きょうみ}を持つようになり、日本アルプスをヨーロッパに紹介^{しょうかい}しました。

1986 年(昭和 61)には、堀金須砂渡^{すさど}にウェストン像が建てられ、2 年後に、来日 100 周年を記念して、同地にウェストン記念館が開館しました。

「井口 喜源治」(いぐち きげんじ) 1870 年(明治30年)～1938 年(昭和13年)



穂高^{ほたか}等々力町^{とどろきまち}に生まれ、松本中学校(現:松本深志高等学校)に入学しました。そこで、英語教師エルマーより聖書を読むことを教わり、卒業後、東京の明治法律学校^{ほりうつがっこう}(明治大学)に学ぶかわら、牛込^{うしごめ}の基督教教会に入り、内村鑑三^{かんぞう}の説教に耳を傾け信仰を深めました。東穂高村^{ひがしほたかむら}高等小学校^{きんむ}に勤務し、内村鑑三の影響^{えいきょう}による無教会キリスト教主義^{むきょうかい}の人格主義教育^{じんかくしゆぎ}によって、生徒を引っ張^{ひがしほたかきんしゅかい}っていきました。また、相馬愛蔵^{そうまいぞう}・望月直弥^{もちづきなおよ}等と共に東穂高禁酒会^{ひがしほたかきんしゅかい}を組織し、基督教の伝導^{でんどう}等を行いました。1898 年(明治 31)11 月には、相馬安兵衛^{そうまやすべえ}・臼井喜代^{うすいきよ}等の有力者^{ゆうりよくしや}の協力を得て、研成義塾^{けんせいぎじゅく}をたちあげました。

「松沢 求策」(まつざわ きゅうさく) 1855 年(安政2年)～1887 年(明治10年)



穂高^{ほたか}等々力町^{とどろきまち}に生まれました。11 歳で四書五経^{ししよごきやう}を了^{とくりよう}し、桂園派^{けいえんは}の和歌^わを学び、15 歳ころ上京して、国学者野田千頼^{のだ ちより}に、国学と和歌を学びました。20 歳の時、学校世話役^{せわやく}と拾ヶ堰^{じっかせぎ}の堰守^{せきもり}を委任^{いにん}されました。堰守^{せきもり}は稲の生育^{せいいう}に合わせて、日々の天候^{てんこう}を考え、公平^{すばや}に素早く、堰の門^{せき}を調整^{ちやうせい}して、水^{のうみん}を農民に送らなければならない激務^{げきむ}でした。この仕事から農民の生活の様子も把握^{はあく}していきました。後に憲法^{けんぽう}の制定^{せいいてい}、議会の開設^{ぎかい}、地租^{かいせつ}の軽減^{ちそ}、不平等条約^{ふびやうどうじやうやく}改正^{かいせい}の阻止^{そし}、言論^{げんろん}や集会^{しゅうかい}の自由^{しゅうかい}の保障^{ほしょう}などの要求^{ようききゆう}を掲げた自由民権運動^{じゅうみんけんうんどう}を進めました。

「臼井 吉見」(うすい よしみ) 1905 年(明治 38 年)～1987 年(昭和 62 年)



堀金田尻^{たじり}に生まれました。東京大学国文科を卒業後、県内外の教職^{きょうしよく}を歴任^{れきにん}し、親友古田晁^{しんゆうふるたあきら}の興した筑摩書房^{ちくましよぼう}の経営を助けました。1946 年(昭和 21)、筑摩書房「展望」^{てんぼう}の初代編集長^{しよだいへんしゅうちやう}に就任し、多くの作家や評論家を世に出す一方、自らも近代文学を中心に、個性的な文芸評論^{ぶんげいひやうろん}を発表しました。1973 年(昭和 48)に、10 年の歳月をかけて完成した「安曇野」全 5 巻により、第 10 回谷崎潤一郎賞^{たにざきじゅんいちろう}を受け、「安曇野」の名を全国的に浸透^{しんとう}させました。

「藤森 秀夫」(ふじもり ひでお) 1894 年(明治 24 年)～1964 年(昭和 39 年)



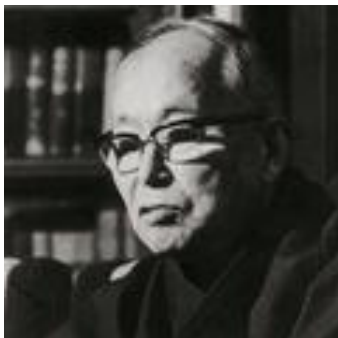
豊科新田^{とよしなしんでん}に生まれました。松本中学校(現松本深志高等学校)、第一高等学校(東京大学^{とうきやうていこくだいがく}の前身^{ぜんしん})を経て、東京帝国大学(現東京大学)文学部に入学し、1917 年(大正 7)にドイツ文学科を卒業しました。晩年^{ばんねん}は、早稲田大学と明治大学で教壇^{きやうだん}に立ちました。やがて、ドイツ文学者として、ゲーテとハイネの研究の権威者^{けんいしや}となりました。「めえめえ児山羊^{こやぎ}」「父さんどうど」「フリージア」「谷間の姫百合^{ひめゆり}」等の民謡・童謡^{どうよう}を作詞しました。1964 年(昭和 39)5 月には、旧豊科中学校の「思索の庭^{しさく}」に「めえめえ児山羊^{こやぎ}」の詩碑^{しひ}が建てられました。

「相馬愛蔵」(そうま あいぞう) 1870 年(明治 3 年)～1954 年(昭和 29 年)



穂高白金^{しろかね}に生まれました。東京専門学校(現早稲田大学)邦語政治科を卒業後、郷里に帰り、養蚕^{ようさん}の研究に打ち込みました。「蚕種製造論」「秋蚕飼育法^{しゅうかんしいうほう}」を書いて、蚕業^{さんぎやうかい}界の進歩改善^{しんぽかいぜん}に貢献しました。1901 年(明治 34), 上京^{じやうきやう}して、パン食を奨励^{しょうれい}するため、本郷の中村屋^{なかつむら}を譲り受けてパン屋を開業し、苦勞の末、新宿で中村屋を開業し成功しました。荻原碌山^{おひはらろくざん}を始め中村彝・山本安曇等の芸術家を援護しました。

「務台理作」(むたい りさく) 1890 年(明治 23 年)～1974 年(昭和 49 年)



三郷野沢^{のざわ}に生まれました。自然に親しみ勉学好きな少年として育ち、勉学と労働を両立^{りやうりつ}させて、学問の道で身を立てようと努めました。明治 43 年、東京高等師範学校(現筑波大学)に入学しました。そこで土田杏村^{つちだきやうそん}(評論家)に西田幾多郎^{にしだきたろう}の「善の研究^{ぜん}」を勧められ、哲学に今までに気づかなかったことを気づかされました。そして、京都帝国大学(現京都大学)文科哲学科に入学、西田幾多郎に師事しました。

1926 年(大正15)、ドイツに留学して、フッサールの指導を受け、帰国後、台北帝国大学の教師となり、「ヘーゲルの哲学」の研究が認められ、文学博士の称号を受けました。その後、東京高等師範学校長に就任しました。戦後、教育刷新委員等に就任し、戦後の教育改革を進めました。「哲学に老年というものはなかろう、目が開かれたそこからいつも新しい歩みが始まる」「反省の考えの出るとき浮かんでくるのは、ふる里の例の赤つち道です」と述べています。「赤つち道」は務台哲学の出发点であり思索の道そのものでした。三郷小学校・三郷中学校の校歌を作詞しています。

「飯沼 正明」(いいぬま まさあき) 1912 年(大正1)～1943 年(昭和18)



豊科細萱に生まれました。1931 年(昭和6)10 月、所沢陸軍飛行学校を卒業しました。同年の11 月、陸軍航空兵伍長に任ぜられ、引き続いて所沢陸軍飛行学校に勤め、翌年には航空部員として朝日新聞社に入社しました。東京・新潟間の定期飛行を始めとして、台湾・満州等にもニュース写真の空輸、写真撮影飛行、宣伝飛行等を行い技を磨きました。1935 年(昭和10)4 月、台湾大地震の際、内地・台湾連絡飛行によって、日本の長距離高速通信飛行の記録を樹立しました。

1937 年(昭和12)4 月6 日、塚越機関士と共に国産機神風号に搭乗し、立川飛行場からロンドンへ向けて出発し、15,357 キロを94 時間17 分56 秒(飛行時間51 時間19 分23 秒)、平均時速300 キロで翔破し、ロンドンのクロイドン飛行場に着陸しました。内外の新聞は、「世界的鳥人」と称して称讃を惜しみませんでした。

※人物の肖像写真は、市ホームページより引用

6. 堰(せぎ)

安曇野は長野県でも屈指の穀倉(穀物の主要産地)地帯です。春になると、田んぼに満々とたたえられた水に、雪をいただいたアルプスが映し出された光景は、よく新聞などにも取り上げられて紹介されています。これは、世界でも美しい風景だと絶賛されるほどです。しかし、この水を湛えた美しさも最初から与えられていたものではありません。また、この辺りの村は水が少ないために、荒れた土地が多くアワやヒエしかつくれませんでした。犀川に水はあっても低くて引けず、梓川や烏川は水の量が少なく利用できませんでした。農民たちの生活は本当にきびしく、荒れ地になんとか水を引いて豊かな米の実る土地に変えたいというのがこの土地の人々の願いだったのです。今こうして、満々と水を湛えて流れている堰、アルプスを映し出している春の田んぼの景色は、わたしたちの祖先が、自らの手と足を使い、血と汗を流して築きあげてきたものなのです。安曇野の田園を流れる堰や用水のことを学んでみましょう。

(1) 拾ヶ堰(じっかせぎ)

拾ヶ堰が誕生するのは、1816 年(今から約200 年前)のことです。松本市下平瀬で奈良井川から揚水して、穂高の烏川に合流するまでの距離は15 キロ。北アルプスの雄姿に向かってほぼ570 メートルの同一等高線上を流れています。拾ヶ堰は、近世を通じて安曇野で開削された矢原堰、新田堰、勘左衛門堰等一連の「横堰」の集大成をなす堰です。

よしのむら なりあいまちむら しんでんまちむら かみほりがねむら しもほりがねむら やばらむら かしわばらむら ほたかむら ほたか
この堰は吉野村、成相町村、新田町村、上堀金村、下堀金村、矢原村、柏原村、保高村、保高
まちむら とどきまちむら じっかせぎ
町村、等々力町村の10ヶ村をうるおしたことから「拾ヶ堰」と名付けられました。



(2) 矢原堰（やばらせぎ）

矢原堰は、江戸初期の1654年開削されました。矢原村の庄屋・臼井弥三郎の功績と伝えられ、
今も水路の取り入れ口には頌徳碑（功績を褒めたたえる碑）が建っています。犀川（高家熊倉）
から取水、北流し、穂高神社付近で地下に潜って流れています。主に矢原・白金・等々力・穂高
町・等々力町の水田地域を灌漑（※川などから水を引いて農地を潤すこと）しています。幹線
水路の延長は、約8.3キロメートルで、灌漑面積は、約440ヘクタール。安曇野を流れる横堰と
しては最初に開削され、その後の江戸時代の堰の開削のさきがけとなりました。1999年6月、万水川
に架かる眼鏡橋（通水路）が豪雨で流され、現在はコンクリート橋となっています。



(3) 五カ用水（ごかようすい）

「五カ用水」は、押野・塩川原・荻原・中村・小泉の五つの村を潤す堰です。江戸時代の1832
年、庄屋の牛越茂左衛門らが中心となり、池田村の村々にも協力を求め開削した用水路で、明科地域押野
地区の内川から取水し、小泉地区で犀川に合流。幹線の総延長は約12キロメートル、灌漑面積は約
100ヘクタール。「五カ用水」は現在も使用され、灌漑用水の他に防火用水としての役目も果たしています。



7. 民俗・信仰

安曇野市のそれぞれの地区には、神社の祠・堂・石像や石碑などが数多くあり、堂内には多くの仏像などが安置されています。現在では、公民館や集会場として利用されているところもあります。

昔の人々は、そこをそれぞれの地の「信仰」や「絆」の拠り所としてきました。現在でもまだその役割を果たして受け継いでいるものもあります。

これらの「文化財」のことを学習して、私たちの生活にどのように結びついているのか考えてみましょう。

(1) 道祖神（どうそじん）



本来は、村の境界におかれて、外部から侵入する邪霊、悪鬼、疫神などをさえぎったり、はね返そうとする民俗神でした。陰陽石や丸石などの自然石を祀ったものから、男女二神の結び合う姿を掘り込んだ双体道祖神まで、その表現方法は多様です。双体道祖神は長野のほか、群馬や山梨にも分布しています。

安曇野市には、500 を越える数の道祖神が主に集落の道の分かれるところに建てられています。道祖神を建てて集落を護り、地域ごとに特色のある祭りを行ってきました。1月に行われる豊科の「福俵曳き」も江戸時代から伝わる道祖神の行事です。そんな遠い昔の人々の思いに心を寄せてみましょう。

(2) 馬頭観音像（ばとうかんのんそう）

物資の国内流通が盛んになると、馬が移動や荷運びの手段として用いられることが多くなりました。

これに伴って、馬が怪我や病気で急死して道端等に供養のために、観音像が建てられることが多くなりました。このように、動物供養塔としての意味合いが強く残っています。



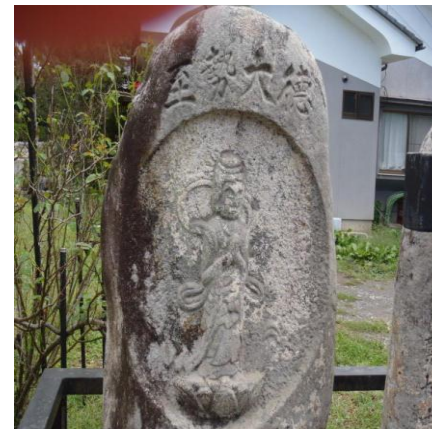


(3) 庚申塔(こうしんとう)

こうしんこう こうしんま たいない さんしちゅう
 庚申講（庚申待ち）とは、人間の体内に三尸虫という虫がいて、
 てんてい どうきょう さいこうしん あくじ
 寝ている間に天帝（道教における最高神）にその人間の悪事を報
 こうしん よどお
 告しに行くといわれ、それを防ぐため、庚申の日に夜通し眠らないで、
 しょうめんこんごう さるたひこ まつ かいしよくこんだん ふうしゅう
 青面金剛や猿田彦を祀って会食懇談などをする風習です。
 こうしんとう こうしんこう つづ こんりゅう
 庚申塔は庚申講を3年18回続けた記念に建立されることが
 多いといわれています。

(4) 二十三夜塔（にじゅうさんやとう）

18世紀の後半から昭和の初期にかけて、日本の各地で「講」
 どういつ しんこう あつ そしき
 （同一の信仰をもつ人々の集まり）を組織した人々が集まって、
 こう しゅそん せいしぼさつ かけじく しょうじん ごんぎょう
 講の主尊である勢至菩薩の掛軸の前で、精進・勤行し、
 飲食を共にしながら月の出を待つという月待ちの行事が行われ
 にじゅうさんやこう まいつきいんれき
 ました。二十三夜講は、毎月陰暦二十三日という遅い月の出
 むか ばん つき おが ねが ごと かな
 を立ったまま迎え、この晩に月を拝むとすべての願い事が叶
 とく よる のうぎょう しゅうかく
 えられるといわれ、特に十月二十三日の夜は農業の収穫
 きねん こう かく ち ひら
 を祈念する講が各地で開かれていました。
 くよう た せきひ つきまちとう
 その時に、供養のしるしとして建てられた石碑（月待塔）の
 やとう
 ひとつが、二十三夜塔といわれています。



とくさんぶつ 8. 特産物

(1) りんご

さんろく せんじょうち
 北アルプス山麓にある扇状地には、広大なりんご畑が
 広がっており、5月にはりんごの白い花が一面に咲きます。
 いちめん
 ここで収穫されるりんごは安曇野の気候風土など自然条件
 きこうふうど
 も整って、最高級の品質を誇ります。
 ととの ひんしつ ほこ
 しゅるい しょじゅん
 主な種類は9月初旬の『つがる』から始まり、『シナ
 ノスイート』・『シナノゴールド』・『秋映』、11月の『ふじ』
 あきばえ
 となります。りんごの中に蜜がたっぷり含まれたさわやか
 みつ
 な甘さが特徴です。旧三郷村時代には、りんごを前面に
 とくちょう ぜんめん
 押し出したイベントとして「三郷アップルマラソンIN安曇
 みさと
 野」も開催されました。
 かいさい





(2) 天蚕 (てんさん)

桑の葉を与え、室内で飼うカイコを家蚕と呼ぶのに対し、屋外で飼育する絹糸昆虫を野蚕と呼びます。天蚕はその野蚕の仲間で、クヌギの葉を食べて育ちます。天蚕の繭から採れる天蚕糸は、淡緑色で独特の光沢と優美な風合いを持ち、その希少性から「繊維のダイヤモンド」とも呼ばれており、その天蚕を織り込んだ紬は有明紬と呼ばれています。

(3) 凍り餅 (こおりもち)

冬場の最も寒い時期に作って、春暖かくなってから食べる保存食です。

お餅を長方形に切り分け、一つ一つ紙で包み、水に4日間位浸します。なるべく寒い夜に水から上げ、春まで軒下に吊るして完成となります。

一年で最も寒くなる大寒の前後10日間が凍り餅作りの勝負です。食べ方は、お湯に浸して柔らかくしたり、そのままかじったりと、春の農作業の合間にいただく「ふるさとの味」です。



(4) まぼろしの黒豆「信濃黒」(しなのぐろ)

信濃黒は30年ほど前に当時の長野県中信農業試験場で開発されたオリジナルの黒豆です。しかし、まとまった生産量がないまま、まさに幻の黒豆となっていました。

安曇野の黒豆は、丹波黒(注1)と比べると若干小粒ですが栄養価は高く、「アントシアニン」は丹波黒と比べても同等以上といわれています。(注1)京都で採れる黒豆のこと



(5) たまねぎ

安曇野市の「玉ねぎ」は、肥沃な大地と、第2次大戦後から培ってきた栽培方法で育ち、おいしく、高品質の体によい夏野菜として、家庭用から加工用まで広く栽培されています。

なお、豊科地区では毎年6月に収穫体験などができる『玉ねぎ祭り』が開催され、たくさんの人で賑わいます。



(6) 信州サーモン

明科にある「長野県水産試験場」が10年の歳月をかけて開発した魚が信州サーモンです。

新たな地域のブランドとして、注目されており、安全・安心という面でも勧められている魚です。全体が銀色でサーモンを思わせることから「信州サーモン」と名付けられたこの魚は、その身もまたサーモンのように紅色です。肉厚な身はクセが少なく、どんな料理にも適しています。

オレンジ色の「信州サーモン」と書かれた旗が、市内で食べられるお店の目印です。

(7) 安曇野米

安曇野の豊かな大地と、きれいな水を使って育ったおいしい「安曇野米」として人々に親しまれています。扇状地に広がる水田は、田植えの季節には北アルプスの山々を映し、安曇野の美しい景観を形づくっています。

安曇野市の稲の作付け面積は、3,390ヘクタールの収穫量は2万1300トンとなっており(注1)、県下で第1位の生産量を誇っています。このことから、安曇野が長野県の穀倉地帯といわれている理由が伺えます。

(注1) 関東農政局長野農政事務所統計部H18年度調べ



9. 民 話

(1) 重 柳 のきつね

むかし、南穂高の重柳しげやなぎに、働き者の喜作きさくという百姓ひやくしやうがすんでいました。ある年の五月、田植えを一人でやっている、「もし、もし、おらにも田植えを、手伝わせてくんねえか。」

と、いう声がします。

(はて、だれずらいな)

と、田植えの手をやすめてみますと、若くて美しい女の人が、田んぼのあぜに立っていました。

「いま、声をかけたのは、おまえさんかぬ。おまえさんのような美しい人が、こんなどろの中へ、へえって仕事をする、それこそ、まっ黒になってとりかえしがつかなくなるじ。」と、いいますと、

「そんなこと、かまわねえわい、おらは、田んぼの仕事がだいすきで。」

と、いうなり、むすめは、きもののすそをあげて、田んぼへ入り、とてもしろうととは思えないくらい、じょうずに、植えはじめました。

喜作は、きょう中には、とても終わらないと思っていたのに、みるまにすんでしまったので、とても喜んで、「手つだってもらったおかげで、きょうの仕事は終わったわい。どうだね、なんにもねえが、おらの家へいって、夕めしでもくっておくれや。」と、むすめを家へつれてかえりました。

喜作が、田植えのどうぐを、かたづけ、さて、夕めしの用いをしようと家にはいったとたん、びっくりしてしまいました。

今まで、ちらかっていた家の中は、きれいにかたづけられ、いろりには、赤々と火がもえています。

(むすめは、どこへ行ったずら)、と、思ってさがしてみますと、井戸ばたで、喜作の汚れたきものの、せんたくをしていました。

(なんと、手の早い、働き者のむすめだろう)

喜作は、すっかり感心してしまいました。

やがて、夕はんになり、二人は、おかゆをたべながら、せけん話をしたのですが、そのうち、むすめは、はずかしそうにいました。

「おら、とらの、というものだか、道にまよってここまできちまったわい。親もきょうだいもいねえ一人もんだで、もしかして、おらが気に入ったらこの家へおいてくれねえかい。」

喜作は、このむすめが気に入っていましたので、

「おらも、みてのとおり、ひとりものだわい。おらほうこそ、おまえさんにいてむらったら、どんなにたすかることか・・・ぜひ、この家にいておくれやめ」 と、いいました。

それから、二人は、なかよく働き、なん年かすぎました。

やがて、じょうぶな男の子が生まれ、親子三人はまえよりもしあわせにくらしました。

ある日のこと、喜作が田んぼの仕事をおえて家へかえってきますと、とらののは、あかんぼうにおちちをくれていました。が、きもののすそから、キツネのしっぽが出ているのを見て、喜作はたいへんおどろきました。

「おまえ、そのしっぽは、どうしただよ。」

「えっ、しっぽが……」

と、いったまま、とらののは、まっさおになりました。

「おまえさん、きょうまでだましていて、わりかったいね。おら、じつは、このあたりに住むキツネだわい。一度でいい、人間のくらしがしてえと思い、おまえさんところへきたが、へえ、おらの、ほんとうのすがたをみられちゃったで、ここで、くらすわけにもいかねえわね。どうか、この子を、しっかり育てておくれや。」

と、いったかと思うと、けむりのようにきえてしまいました。

それからというものの喜作は、この赤んぼうを、とても苦勞してそだてました。が、この子は大きくなるにしたがい、^{ようすいろ}用水路をほるなどのしごとを、いくつもしたと、いいつたえられています。

(信濃教育会出版 平林治康著より)

(2) 八面大王 (はちめんだいおう)

^{かん む てんのう}桓武天皇の昔、^{ありあけざん}有明山に^{ぎ し き}魏石鬼八面大王と名のる鬼が住んでいた。大王はどこへでも飛んでいつて人々をさらい、^{ざいさん}財産を^{ぬす}盗み取っていた。

さて、^{ありあけ}有明は^{ふるまや}古厩村の^{やむら}矢村に、幼い頃に父親を八面大王にさらわれた^{やすけ}弥助という男が、母親と二人で暮らしていた。ある年の暮れ、弥助が正月の買い物をしに、山を下っていくと、近くの林で^{はげ}激しい鳥の^{はとお}羽音が聞こえた。見ると、一人の男がわなにかかった^{やまどり}山鳥を今にも絞め殺そうとするところである。弥助は、男に正月用の金を渡し、山鳥を離してやった。そんなわけで、年取りは貧しいものとなったがその夜、誰やら戸口をたたく音がする。開けると一人の娘が立っていた。

「私は池田へまいりたいと来た者ですが、道に迷って困っています。どうか一晩泊めていただけないでしょうか。」

二人は娘を家に入れ、にぎやかな年取りを過ごした。^{ふぶき}吹雪が続き、娘は^{たいざい}弥助の家に滞在を続けたが、やがて春を待たずに二人は結ばれた。

雪解けを待っていたかのように再び八面大王が^{あば}暴れだした。この^{うわさ}噂は^{みやこ}都にも伝わり、^{しょうぐん}将軍の^{さかのうえのたむらまろ}坂上田村麻呂が^{おうしゅう}奥州の^{え ぞ}蝦夷を^{せいぼつ}征伐する途中で八面大王を征伐することとなった。田村麻呂は八面大王に^せ攻めかかったが、^{ていこう}抵抗にあい多くの^{ぐんぜい}軍勢を失う結果となった。手こずった田村麻呂は近くの^{まんがんじ}満願寺に^{がん}願をかけた。すると^{かんのん}観音様が^{きのえね}現れ、「^ね甲子の年、^ね子の日、^ね子の刻に生まれた男子に、三十三ふしある山鳥の尾を使い矢を作らせ、それで^い射たら大王を倒せる」とのことだった。将軍は村々に^{ふれ}布令を出し、その男子を探したところ、それは^{ふるまや}古厩村に住む弥助に違いないとのことであった。弥助は父親の^{かたき}敵を討てる機会と引き受けたが、三十三ふしもある山鳥など見たことも聞いたこともない。

すると女房にようぼうが

「私にお任せください。実家に行けばあるかもしれません。」

と言う。弥助は喜んで女房を実家にやると、次の朝確かに三十三ふしある山鳥の尾を持って帰ってきた。弥助はそれで矢を作り将軍けんじょうに献上けんじょうすると、将軍はいたく喜んで弥助にたくさんのほうびあたを与えた。しかし、喜んで家に帰ると女房が

「私は前に助けていただいた山鳥です。あの山鳥の尾は私ども一族の魂たましいがこもったものです。これでご恩返しができました。山へ帰らせていただきます。」

と言い出すと、山へ飛び立って行ってしまった。

その後、将軍しょうぐんは弥助の矢を使って八面大王を亡ぼした。弥助親子は来る日も来る日も山鳥が帰ってくる日を待ち暮らしたという。

また、田村麻呂は二度と八面大王が甦よみがえらないように、身体をばらばらにし各地に埋めた。頭を現在の松本市筑摩神社の首塚つかま、耳を穂高有明の耳塚くびづか、足を同じく穂高有明の立足みみづか、そして胴体を北穂高たてあしの狐島どうたいと大王わさび農場がある御法田に埋めたと言われている。

(3) 室山のデーラボッチャむろやま

大昔、日本ができたとき「デーラボッチャ」という巨人きょじんがいて、高い山をけずって谷をうめたり、土地の高い所と低い所をならして平地にしたりする仕事をしていた。このデーラボッチャが残した足跡あしあととか、土を運搬うんぱんしたとき、もっこのこぼれた土で山ができたとか、使った藤づる、火打石ひうちしなどたくさんの伝説が残されているが、室山もデーラボッチャが運んだ土でできた山だといわれている。

昔、デーラボッチャが、東山の方が西山より低いので、東山の神様に頼まれて、西山の神様が目を覚まさないうちに、西山の土をもっこに入れて東山へ運んだ。しかし、もう一もっこというところでにわとり鶏に鳴かれて夜が開けた。あわてたデーラボッチャは、その一もっこを落としてしまった。その土でできたのが室山むろやまと言われている。

(4) 常念坊物語 (じょうねんぼうものがたり)

ある日のこと、有明山の方から真っ白な火の玉が飛んできて乗鞍岳のりくらだけの中腹ちゅうふくに消えた。「ありゃ一八面大王の一の子分の常念坊こふんという鬼じょうねんぼうが飛行の術でまゆみ岳ひこうへ飛んできたらしいぞ」誰もがそう心配しました。やがて年の暮れになり、村の市は大勢の人々で賑わいにぎをみせていました。日が暮れて酒屋さかやも店じまいの準備をしておりますと

「酒、五升ごしょうおくれ」

見ると髪の毛を背中までたらし、ぼろぼろの衣ころもを着て、杖つえを突いた年寄りの坊さんが五合徳利ごごうとっくりを差し出して立っていおります。酒屋の主人しゅじんは

「ご冗談じょうだんをおっしゃっちゃ困ります。五升なんて入りません」

と言うと、その坊さんは

「文句を言わずに五升入れてくれ」
と怒鳴りました。主人は仕方なく酒を注ぎ始めましたが、不思議なことに五升の酒がこの徳利にすっかり入ってしまいました。

「どうだ、わしの言ったとおりだろうが」
そう言って坊さんはカラカラ笑うと闇の中に消えていきました。

このように、村の市がたつと決まって坊さんが現れて酒を買って行くので、山の化け物か鬼だろうと人々は噂しあいました。ある年の暮れのこと、どうにもがまんできなくなった酒屋の二人の若い衆が、山へ向かう坊さんの後ろをつけてみました。年寄りとも思えないすごい速さで歩いていく坊さんを見失うまいと若い衆は走り続けました。しかし、まゆみ沢へ入っていった坊さんの姿は岩山の中へ吸い込まれるように消えていきました。若い衆は坊さんの消えた辺りを見つめていましたが、気を取り直して帰ってきました。酒屋の若い衆からこの話を聞いた村人たちは、

「八面大王が討たれた時に、まゆみ岳に飛んで来た常念坊に違いねえ」

と口々に噂しました。また恐れて、日暮れ時には子どもにまで、

「常念坊が出てくるで、早く家に入れよ」

と言っていました。しかし、常念坊の身なりの恐ろしさは人々の心に残りましたが、その他には何も悪いことはしませんでした。しばらくして、村人たちは常念坊の住みついているまゆみ岳のことを常念岳と呼ぶようになりました。こうして村人の呼び方が変わってからは、暮れの市には常念坊は姿を見せなくなりました。しかし、常念岳のその勇壮な姿とともに常念坊の姿も雪形として村人の心の中に今も生き続けています。

(平林治康『常念坊物語』より)

(5) 泉小太郎 (いずみこたろう)

大昔、松本平は一面の湖だった。この湖に住んでいた白龍と犀龍は、その子を八峯瀬山(鉢伏山)に生んだ。その子は日光泉小太郎と名づけられ、牛伏寺中山のあたり、また城山の放光寺あたりにも住み育ったと言われている。

その後、母の犀龍は、自分が龍であることを小太郎に見せることができず、湖底にいたが、小太郎はついに尾入沢(島内平瀬と田沢の境)で、母犀龍に会うことができた。

そこで、母犀龍は小太郎に言った。

「私は諏訪大明神が身を変えたものです。お前は、この私の背に乗り、この湖の壁を破り、ここを人の住める里にしろ」

小太郎は、母に言われるまま尾入沢(犀乗沢)から犀龍に乗り、山清寺(山清路)や水内の岸壁を突き破り、千曲川の川筋から越後の大海まで湖の水を流し、この地に平らをつくった。

安曇野年表

時代	西暦	できごと(安曇野市関係は赤字)
縄文 じようもん	前13,000頃	ていじゆうせいかつどきゆみやしょうかいし 定住生活、土器や弓矢の使用開始
	前5,000頃	あづみのしゅうらくしゅつげんやしきいせき 安曇野に集落が出現(ほうろく屋敷遺跡)
	前3,000頃	ちくまさんちきたさんろくしゅうらくぞうかはなれやまいせきほたかまきたやいせきほたかまきひがしおぐらい 筑摩山地や北アルプス山麓で集落が増加【離山遺跡(穂高・牧)、他谷遺跡(穂高・牧)、東小倉遺跡(三郷・東小倉)、そり表遺跡(堀金・田多井)】
	前2,500頃	あかしなひかるきたむらいせきねんやくたいじょうもんじんこつはつけん 明科光の北村遺跡(S62年約300体の縄文人骨発見)
弥生 やよい	前9～8世紀	にしにほんすいでんのうこうかいし 西日本で水田農耕の開始
	紀元前後	あづみののうこうしゅうらくせいりつくろさわがわうがんいせきみどりがおかいせき 安曇野で農耕集落の成立(黒沢川右岸遺跡、緑ヶ丘遺跡)
	57年 3世紀ころ	ごかんこうぶていかんのわのなのこくおうきんいんののこくおうあた 後漢光武帝が「漢委奴国王」金印を奴国王に与える ひみこじだい 卑弥呼の時代
古墳 こふん	3世紀ころ	ぜんほうこうえんふんこふんぞうえいかいし 前方後円墳などの古墳造営の開始
	538年	ぶつきょうでんらい 仏教伝来 きたさんろくあかしなうしおちくおおこふんつくふくそうひんどきばぐぎよくらいちよくとう 北アルプス山麓や明科潮地区で多くの古墳が作られる、副葬品は土器、馬具、玉類、直刀など
飛鳥・奈良 あすか・なら	645年	たいかかいしん 大化の改新
	710年	あかしなちいきかわらぶきじいんこんりゅうあかしなはいじ このころ明科地域に瓦葺の寺院が建立(明科廃寺)される へいじょうきょうみやこ 平城京を都とする あづみぐんわみょうるいじゅうしょうたきべやはらさきしなむらかみよんごうなまえ このころ安曇郡ができ、『倭名類聚抄』にのちの高家、八原、前科、村上の四郷の名前がみえる。
平安 へいあん	794年	へいあんきょうみやこ 平安京を都とする せいいたいしやうぐんさかのうえのたむらまるえみしとうばつおもむ 征夷大將軍坂上田村麻呂が蝦夷討伐に赴く
	927年	えんぎしきじんみやうちやうほたかじんじやなまえの 「延喜式神名帳」に穂高神社の名前が載せられる
	1185年	へいしめつぽう 平氏が滅亡する みなもととのよりともしよこくしゅごじとうせつち 源頼朝が諸国に守護・地頭を設置する
鎌倉 かまくら	1192年	みなもととのよりともせいいたいしやうぐんにんかまくらばくふせいりつ 源頼朝が征夷大將軍に任じられる(鎌倉幕府の成立)
	1317年	あかしなちいきこうきゅうじもくぞうにつこうがっこうほさつりゅうぞうつく 明科地域の光久寺の木造日光・月光菩薩立像が造られる
南北朝・室町 なんぽくちやうむろまち	1333年	けんむしんせい 建武の新政
	1400年	おおとうかつせんにしなしだいもんじいつきおがさわらしやぶ 大塔合戦で仁科氏ら大文字一揆が小笠原氏を破る
	1552年	たけだしこいわたけじょうせお 武田氏が小岩嶽城を攻め落とす あづみぐんたけだしとうち このころ安曇郡が武田氏の統治となる
	1567年	あづみぐんぶしただしんげんちゅうせいちか 安曇郡の武士たちが武田信玄に忠誠を誓う
安土桃山 あづちももやま	1582年	たけだしおだとくがわれんごうぐんせめつぽう 武田氏が織田・徳川連合軍に攻められ滅亡する あづみつかまりやうぐんきそしとうち 安曇・筑摩両郡が木曾氏に統治される ほんのうじへん 本能寺の変 あづみぐんまつもとじやうしゅおがさわらしとうち 安曇郡が松本城主小笠原氏に統治される
	1600年	せきがはらたたか 関ヶ原の戦い

時代	せいれき 西暦	できごと(安曇野市関係は赤字)
江戸 戸ど	1603年	徳川家康が征夷大將軍に任じられる(江戸幕府の成立)
	1654年	臼井弥三郎が中心となり、矢原堰を開削する
	1686年	貞享騒動が起き、多田加助ら首謀者28名が処刑される
	1725年	戸田氏が松本城主となり、川手の村々(当時は麻績組)は幕府領となる
	江戸時代後期	このころ安曇地方に多くの道祖神が造られ始める
	1814年	十返舎一九が成相新田村や満願寺を訪ねる
	1816年	等々力孫一郎、中島輪兵衛、平倉六郎右衛門らが拾ヶ堰の開削工事を完成させる
	1832年	犀川通船開始
	1847年	善光寺地震
	1853年	ペリー率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀に来航する
明治・大正・昭和	1867年	大政奉還
	1868年	戊辰戦争 江戸幕府が新政府軍に降伏する
	1869年	版籍奉還 このころ廃仏毀釈により安曇地方の多くの寺院が荒廃する
	1871年	廃藩置県 安曇野は松本県(のちの筑摩県)に属する
	1873年	地租改正 藤森桂谷が実践社を開設する 臥雲辰致が太糸紡織機(ガラ紡)を発明
	1876年	筑摩県を廃し、長野県へ併合する
	1879年	南安曇郡役所を豊科に置く
	1880年	松沢求策らが奨匡社を創立
	1889年	大日本帝国憲法発布
	1894年	日清戦争開戦
	1898年	井口喜源治が研成義塾を開く
	1904年	日露戦争開戦
	1910年	荻原碌山が彫刻の石膏原型「女」を制作 宮下太吉らが爆発物取締罰則違反で逮捕される(大逆事件のきっかけ)
	1914年	第1次世界大戦始まる
	1937年	飯沼正明・塚越賢爾が純国産機「神風号」で東京-ロンドン間の飛行に成功 日中戦争開戦
	1939年	第2次世界大戦始まる
	1941年	太平洋戦争開戦
	1942年	清沢洌が『暗黒日記』を書き始める
	1945年	穂高町(現穂高)と有明村(現穂高有明)が空襲を受ける 終戦